

☆世界の子どもたち☆

遠い国の親戚マジヤール

——ハンガリーの国を訪ねて——

西 森 禎 子

ハンガリーへの旅立ち

ハンガリーという国について、日本人はあまりよく知らない。ところがハンガリー人（自称マジヤール人）は、日本のことを「遠い国の親戚」と呼んでいる。彼らはヨーロッパ唯一のアジア系民族であり、遠い日本に対して親しみと憧れの感情を持って

いるのだ。

ハンガリーという国を身近に感じたのは、個展を開催した折、ギャラリーに姿を現わした一女性との出会いからだ。その出会いは、人生を見る眼が深くなる素敵な出会いとなった。彼女はカタリーヌさんと言い、日本人と結婚して横浜生活が四年目、流暢な日本語を話すハンガリー生れの魅力的な人であった。

彼女の協力もあって、ブダペストに住む教育関係者から「ぜひ児童画の合同展をしましょう」という誘いがきた。児童画を通して子どもたちが広く世界へ目を向けて、一つになって手をつなぎ合い、円という一つの調和の中から豊かな情操と愛が芽生える糸口になるのなら、「よし、合同展をしよう」と私は大決心をして、三百枚近い日本の子どもたちの絵を持参してハンガリー

へ向ったのは、一九七七年の九月のことだった。彼女と知り合って八か月目には、カタリーヌさんの生れ故郷ブダペストに来ていたことになる。

初めて見るハンガリーの首都ブダペストは、ドナウ河畔にゴシックスタイルの建物が壮麗に影を映し、逆光の時に見る国会議事堂は、ドームと八十八の尖塔のシルエツトだけが映しだされ、墨絵の様な実に静かなたたずまいだった。

ブダペストという名は、「丘」を意味するブダと、「平野」を意味するペストからなっているが、そのブダ側の丘の上には、ソ連軍によるナチからの解放を記念する碑が建てられており、それだけにまたソ連による重圧感も感しられた。

幼稚園での絵画

ブダペスト市内の幼稚園を見学してみた

が、幼稚園として独立した一つの建物ではなく、七階建てのビルの五階が幼稚園だったりした。他の階は市民の住宅や事務所になっており、外でのお遊びは、近くの広い公園につれていって遊ばせていた。

なお、幼稚園にしてもお店にしても全て国営である。幼稚園では、三歳から六歳まで（六歳の九月から小学校）、朝の六時から夕方の六時まで園児の世話をしている。全ての女性が働くハンガリーでは、幼稚園で子どもの世話をし

てもらえるので、安心して仕事に専念することがができる。ただし子どもが三歳になるまでは、母親が家でみることは許されていた。その場合、休職することになるわけだが、給料の六割が支給されるそ

うだ。

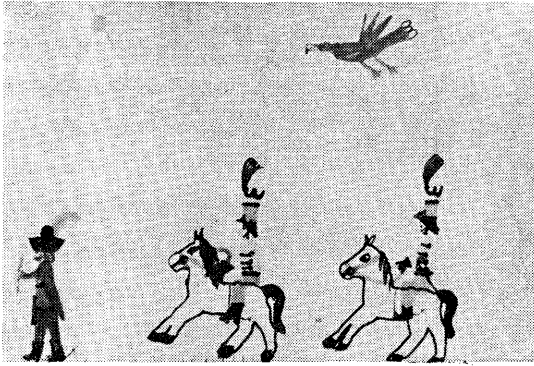
私がちょうど幼稚園を訪ねた時は、年長組のお絵描きの時間で、まず最初に感じたことは、一枚の紙にしても一本のクレヨンにしてもその材質の悪さだった。クレヨンで描くと蠟がとれてきて画用紙にのりなく、それは日本と比べられないほどの悪さだった。

しかし子どもたちは、とても楽しそうに描いており、のぞいてみると、特にナジ・



ガウル君の「パイプをくわえているおとうさん」の絵は材質の悪さを乗り越え、クレヨン運びも生き生きと、心豊かな温かさを感じさせた。

もうすぐ四歳になる園児の「駅に送りに来たおじいちゃんの涙」は、線描だけの



のだったが、感情の入った力強い絵だった。このイシュトヴァン君は、描くことが何より好きな年長組の子もだった。今はカラーマジックに興味を持ち、とにかく早い運びで、トルコ戦争にしても馬や兵士など、色あいもよくドンドン描いていくのは驚くばかりであった。

材質の悪さなどの規制の多い中で、子どもたちに創造性や素朴さ、夢を与えているものは何なのだろう？ その生活をのぞいてみると、日本の周囲から失なわれている自然が、ハンガリーでは豊富にあった。自然から生まれてくる色あいが豊かであり、温かいイメージとなって溢れていた。規制されればされるほど、逆に欲望となって創造性を導き出してくるようだった。

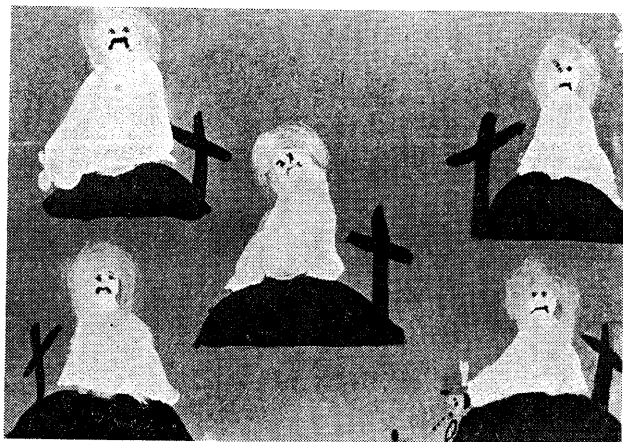
小学校での絵画

この国には、ハンガリーが生んだ偉大な

作曲家コダーイ・ゾルタンがハンガリーで昔から歌い伝えられた子ども歌を、音楽教育の中心として、歌、踊、楽器を使って情操教育をする独特のコダーイ・システムがある。小学校の絵画授業（四年生）を見学した時、子どもたちの歓迎の歌が、とても自然でこの教育の成果としての心豊かな生活を垣間みる思いがした。

その日は、専門の美術教師のもとでクマのぬいぐるみの写生をしていたが、創造性を深める一つとして、ハンガリーの最大の詩人ペトーフイの詩を聞かせて絵にする方法もとられている。ペトーフイは今から一五〇年前、ハンガリー平野中部の田舎で生れ、二十代の前半に発表した多くの詩集は、自由を求める素朴な彼の情熱が、当時ハンガリー社会に浸透していたナシヨナリズムの高まりと結びついて短期間のうちに熱狂的な人気を得た人である。

独立戦争（一八四八年）の時、民衆の前



で朗読した「起きよ、マジヤール人!!」
や自然の美しさを讃えた詩など、素敵
な詩がたくさんある。子どものために
書いたという長編叙事詩「勇者ヤーノ
シュ」は、牧童の若者ヤーノシュが、
死んだ恋人を生きかえらせるには「命
の池」へバラの花を一輪投げ込むこと
だと神からのお告げで知り、この命の
池を世界中、至難の試練を克服して、
探し求めていく話である。

この至難の中に、七つの顔を持つ化
物の姿をした竜との戦い、おし寄せて
くる魔法使いの群れとの戦いがあり、
疲れて寝こんだところが墓のそばで、
お化けどもが出て来てヤーノシュを殺
すおもしろい相談をするところがあっ
て、楽しい叙事詩である。

六歳から十四歳の子どもにベトフ
イの詩を聞かせて描かせた絵を見たこ
ころ、戦争の詩にしても暗いイメージ

の絵ではなく、実に色彩も美しく、表現も
豊かで楽しいものが多かった。また「勇者
ヤーノシュ」の絵にしても夢があり、筆運
びも生き生きして、おもしろく表現してい
た。

児童合同展

ハンガリーの子どもの絵と、日本から持
参した子どもとの絵との合同展会場には、
子どもづれのお母さんや先生が、たくさん
訪れ、「遠い親戚」としての日本へ、憧れ
に似た思いをいろいろとめぐらしているよ
うであった。

展示されている日本の子ども達の絵の中
で、UFOをテーマにした絵を指さし、
「これは何か」という質問が子どもたちか
ら集中した。日本で話題になっているUFO
の説明をすると、ハンガリーにはUFO
の話題すらないので、UFOのことをオバ

ケくらいに思つて驚くだけで、科学者が認めない限り興味を持つともしなかつたのである。

日本の神社の絵に目がとまり、礼拝する建物なのに十字架がつかないのは不思議であると、親子で首をひねりあつていたり、特に園児たちは日本の田んぼの風景画に大へん興味を示していた。水につかつて田植えをしている絵等に、次から次へと質問が出て目を輝かしていたのである。ハンガリーの主食はパンで麦をつくるのに対し、日本は米という生活様式の違いから田んぼを見たこともない園児たちから楽しい質問ぞめにあつたのであつた。

氣候風土からくる色彩の違いは見られたものの、今や創造する心は世界皆同じで、レベルに差はない様に思われた。

* * *

ブダペストの公園から、今もわらべ歌がきこえてきます。日本の「カゴメ、カゴメ」のような、一人目をとじて坐っているおさげの子。その子を囲んでまわります。

春の風、

水が流される、

小鳥の全ては、恋人を選びます。

私の花よ、花よ。

私は誰を選びましょうか。

花よ、花よ。

私はあなたを、

あなたは私を、選びましょう。

小さな手と手のつなぎの輪が、世界へ向けて、大きな夢を創造していく。

(画家)

